

# 了魅し惑誘 した映画たち

これからも  
映画とともに

志正然徒

## はじめに

---

映画を観始めてから何年経ったのだろうか。全ては、高校1年の冬、「ルパン三世カリオストロの城」から始まった。その時、宮崎駿という人物の存在すら知らなかった。その後彼の全作品を観ることになるなんて、まるで想像もしていなかった。今でも強烈に覚えている、ジュディ・フォスター主演の「フォクシー・レディー」。札幌の映画館で2本立てでの1本の小さな、小さな青春映画になぜかところがゆれた。ルーカスの「スターウォーズ」、スピルバーグの「未知との遭遇」をちょっと遅れて観ながら、感動し、黒沢の「影武者」に驚いていた、そんな時代を過ごしていた。

特に映画にはまったのは、ジョン・ベルーシとダン・アイクロイドの「ブルースブラザーズ」。映画的にコメディで面白かったという以上に、ジェームス・ブラウン、キャブ・キャロウェイ、アレサ・フランクリン、レイ・チャールズといった、アーティストの音楽に酔いしれ、それからR&Bにはまり、ジャズに傾倒していったのは、まさに映画が火付け役であった。

このような高校時代から、大学時代は映画を観ていただけ、社会人になって東京に出てきたが、中目黒の寮に住んでいたことから、渋谷、銀座、新宿、池袋を又にかけて、少ない休日に映画を観まくった。結婚してからも、妻と観、子供ができては、ビデオで観て、40代前半から、年30本ペースで観て、今50歳になって、夫婦50割引を利用し、7月現在で、30本、ほぼ映画館で観ている。16歳から今迄、34年間で、観た映画は1000本を超えた。

この映画のタイトルは、主に社会人になってから、時間的制約の中で、どの映画をチェイスすればいいのかという問いに、映画が私を誘惑してきたというのが、素直な想いである。「ぴあ」を見て、「キネマ旬報」を読んでいるうちに、映画が私を誘惑し、そして魅了していった。

そのような経験から、今年に入ってから私を誘惑し、魅了した映画を書きたくなった。今、この時、どの映画が私を誘惑し、魅了したのかを、この本を公開しながら、どんどん付け足していきたい。私の批評、エッセイを参考に、映画館に足を運んでもらってもいいし、DVDでも観てもらいたい。魅力ある映画は、映画が誘ってくるのだ。わざわざ、仕事で疲れている中、時間とお金をかけて、映画館に足を運ぶ。それゆえ、この本には、映画館で観たものしか書いていない。どのような気持ちで映画館に行き、映画館がどのような空気であったのかということも、読者に伝えたい。この本は、私が50歳を迎え、それでも映画の誘惑にあがられられない喜びを感じてもらえたら幸いだ。さあ、今、どの映画があなたを誘っているか、感じてみてください。

## 「風立ちぬ」

今年の夏休み映画の超目玉作品、宮崎駿、スタジオジブリの最新作。「はじめに」にも書いたように、私の映画体験は、宮崎駿から始まった。そして同時代的に彼の全作品を観てこれたのは、幸福だと思っている。その宮崎駿の新作、もう初日に映画館にかけつけた。映画館に8割の人、シネコンには珍しい人の多さだ。さすがジブリの集客力と納得。「紅の豚」以来の大人を主人公にした映画。しかし、舞台は日本、時代設定は戦前、映画の背景は全く相違している。さあ、どんな映画か、期待してスクリーンに対峙した。

### 「美しさとはかなさと」

宮崎駿が初めて描き出した実在の大人の男は、気骨のある男であった。口数は少ないが、自分の夢を実現するため努力し、何事にも動じない、自分の信念を貫き通す、エリートであり、ある面かっこいい男である。しかし、宮崎駿は、男が生きた時代背景によって、矛盾する二つの事を提示していた。

男が夢に向かって生きているとき、関東大震災、昭和恐慌が起こり、家もなく、職もなく、病気に苦しむ大衆がいたことをさりげなく描き、それが戦争につながっていく前触れのように時代をしっかりと切り取っていた。そのことによって、「美しさとはかなさ」という矛盾することを強く浮かびあがらせている。

男が美しい飛行機を作ったのは、戦争の時代、零戦という戦闘機であった。愛し結婚した菜穂子は容姿も心も美しい女性であった。しかし、男が作り上げた美学の象徴は全て破壊され、菜穂子もその時代のはやり病、結核によって死した。男が精魂込めて作り上げた意図しない美しい飛行機も、愛する妻も失った、男は全てを失った。

美しさを求め最終的に全てを失った男の道のりを丁寧に情熱的に描くことによって、はかなさが強く胸を打つのである。それゆえ二時間映画を観ていられたのである。しかし、この映画は、はかなさを描きながらも、宮崎駿がメッセージを投げかけていたから、前向な気持ちを抱いて映画館を後にできたのだ。それは、大震災が起こり、経済不況が続き閉塞感に包まれている時代というのは、まさに現代と類似している。

それゆえ、今、平和な時代において、この男のように世界から吸収し世界に誇れる、グローバルな人間、出でよというメッセージを受けとった。今は、とことん好きな人を愛し、好きなことを世界を相手に出来る時代であると宮崎駿は、この映画から発信している。美しさに導かれ、生き、失くし、ユーミンの「ひこうき雲」がはかなさを増幅する反面、今の大人に大きな希望を抱かせてくれた、宮崎駿のエールが伝わってきた映画であった。

上記が私の映画評である。正直観終わった後は、ユーミンの「ひこうき雲」の詩とメロディーがかぶさり、涙が出てきて、灯りがついてもすぐ立ち上がれなかった。今、公開されて1ヶ月たち、賛否両論あるが、私は、時代が持っていたはかなさの空気の重さとそれでも美しさを追い求めた二郎の気骨と菜穂子も全てを失った悲劇性が、まさに時代であったことが心を強く打ったのだ

。宮崎駿がこの境地をスクリーンにさらけだすように描き出したことが、非常に印象的であり、今の私達に向けたメッセージを投げかけていたと感じたのである。そう、時代は平和であり、世界は狭くなっている。この映画を観て、今を考える、そんな映画があってもいいのではなからうか。